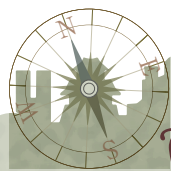


June
号外
2022

過去と現在を行き来しながら、
未来を考える壁新聞

上町台地
今昔タイムズ



上町台地 今昔フォーラム

U+MACHIDAICHI+KONJAKU+TIMES
vol.17 Document



発行 大阪ガスネットワーク エネルギー・文化研究所 (CEL) / 企画・編集 U-CoRoプロジェクト・ワーキング

問合せ先 tel.06-6205-3518 (担当:CEL弘本)

(CEL弘本由香里、B-train橋本護・小倉昌美)

ホームページ <http://www.og-cel.jp/project/ucoro/index.html> ※U-CoRo=ゆーころ (上町台地コミュニケーション・ルーム)

なにわ文化の生き字引とも称され、町人学者の系譜を受け継がれた書誌学者・肥田皓三先生のご逝去から一年余が過ぎました。

この春、メモリアルトークとして、「上町台地 今昔タイムズ」&フォーラムと肥田先生のご縁を振り返るとともに、肥田先生と濃密な交流をお持ちで、折々に私どもの取り組みにもご協力賜っております、ゲストお三方に上町台地にご参集いただき、春の一夜、肥田先生を偲ぶ座談の機会を持たせていただきました。肥田先生のご冥福をお祈り申し上げますとともに、先生が探求し続けられた、なにわ文化の“粋”に触れ・語り継ぎ、その貴重な系譜を受け継いでゆく、よすがとなることを願って、期間限定で録画の配信を実施しました。



版画「蕪菊庵」が表紙になった号の雑誌「上方」を示しながら講演される肥田先生



「上町台地 今昔フォーラム」第9回会場風景 (平成30・2018年)



▲「上町台地 今昔タイムズ」
第17号 (1面)①



「上町台地 今昔フォーラム」第17回の収録風景

観
畫
觀
櫻
一
夕
歡

肥田皓三
美知子

桜の季節に催される
書画の無花果(一軸)
会芳名録に肥田先生
が寄せられた詞書き

上町台地 今昔フォーラム VOL.17 (録画配信)

メモリアルトーク

“相聞 (あひぎこえ)” の台地から、
肥田皓三先生を偲ぶ

- ゲストスピーカー: 橋爪節也 (大阪大学総合学術博物館教授・文学研究科教授兼任)
明尾主造 (大阪商業大学公共学部教授・商業史博物館首席学芸員兼任)
滝北 岳 (読売新聞大阪本社編集委員) (敬称略・順不同)

司 会: 弘本由香里 (大阪ガスネットワーク エネルギー・文化研究所 所任研究員)

- プログラム: 第1部「上町台地 今昔タイムズ」&フォーラムから 肥田先生を偲ぶ〜先生が愛した資料とお話」

U-CoRoプロジェクト・ワーキングによるレビュー

- 第2部「肥田先生の語りを振り返り、なにわ文化の“粋”に触れる・語り継ぐ」

ゲストスピーカーによる座談

※当メモリアルトークは、2022年3月9日夜、大阪ガス実験集合住宅NEXT21ホールにて無観客で収録・編集いたしました。3月下旬から6月末までネット上で配信しています。

- 主催: 大阪ガスネットワーク エネルギー・文化研究所 (CEL) 企画・運営: U-CoRoプロジェクト・ワーキング (CEL弘本由香里、B-train橋本護・小倉昌美)

肥田先生と上町台地 今昔タイムズ

肥田皓三先生は、昭和5(1930)年、大阪・島之内にお生まれになり、戦災に遭われ、長い闘病の後、大阪府立中之島図書館を経て関西大学文学部教授を務められました。大阪をこよなく愛され、書誌学、大阪庶民文化、上方落語史、近世・近代文学など、幅広い分野の資料収集と研究に尽くされました。

私どもが、大阪・上町台地を舞台に取り組んでまいりました、「上町台地 今昔タイムズ」と関連フォーラムでも、肥田先生から多くの貴重な資料やご知見をご提供いただいて参りましたが、惜しくも先生は昨年(2021年)、2月22日に急逝され、一年

余が経ちました。

このたび、先生のご功績を偲び、尽きない感謝の想いを込めて、先生と深い交流をお持ちであったお三方をゲストにお招きし、メモリアルトークを行わせていただきます。

本日のテーマに用いております、「“相聞(あひぎこえ)”の台地から」という言葉は、昨年秋に発行しました「上町台地 今昔タイムズ」第17号のタイトル「“相聞”の台地を旅する 言葉の力で呼び覚ます歌枕のコスモロジー」(1面①)からとっていますが、本号はかつて肥田先生に教えていただいた、上町台地と歌にまつわる2つのトピックを入りに企画したもので、先生への追悼の想いを込めて編集したものです。

さらにバックナンバーを振り返りますと、

「大阪の郷土玩具・生玉人形」を紹介した第7号②、「近世末期の大坂が生んだ才人・暁鐘成★」を紹介した第10号の特別編集のしおり③、「大阪・上町台地と本の世界」を掘り下げた第9号のフォーラム④、「モダン大阪の若き才能の軌跡」を追った第13号⑤など、先生に惜しめないご協力をいただきました。

本日のメモリアルトークは、「上町台地 今昔フォーラム」の第17回にもあたるものですが、はじめに私(弘本)から簡単にレビューをさせていただきます。肥田先生にご協力いただきました、今昔タイムズやフォーラムの中から、先生が愛された資料と先生のお言葉をピックアップして、ご紹介させていただきます。

<メモリアルトーク 第1部>

「上町台地 今昔タイムズ」&フォーラムから
肥田先生を偲ぶ～先生が愛した資料とお話

構成：大阪ガスネットワーク CEL/U-CoRo プロジェクト・ワーキング (CEL 弘本由香里、B-train 橋本護)

生玉人形を手にする肥田先生(「上町台地 今昔フォーラム」第9回)

生玉人形。「上町台地 今昔タイムズ」第7号掲載の、佐々木義昂さんによる再現作品。これを参考に大阪くらの今昔館のボランティア・町家衆の方々が再現に取り組んでいる。①

「上町台地 今昔タイムズ」第7号②



『鳥羽絵三国志』に描かれた米澤彦八②



『五畿内産物図会』文化10・1813年の生玉人形の図③



肥田先生がご持参された生玉人形④

★**暁鐘成**(あかつき かねなり、1793～1861)は、江戸時代の大坂の浮世絵師、戯作者。
★**幸田露伴**(こうだ ろはん、1867～1947)、小説家。明治文壇で尾崎紅葉とともに「紅露時代」を築く。
★**尾崎紅葉**(おさき こうよう、1867～1903)は、小説家。言文一致体の「多情多恨」や「金色夜叉」等で知られる明治期の国民作家。

肥田先生が愛した生玉人形

肥田先生は、大阪の郷土玩具のなかでも、今は絶えた生玉人形①をこよなく愛されています。

「生玉土産の生玉人形は、(落語の始祖)米澤彦八の大名姿②を人形にしたもの」/「文化10年の『五畿内産物図会』」③に、生玉人形の図が出ていることから、その誕生は19世紀初め以前に遡るのは確実」とおっしゃっています。

今昔フォーラム第9回にご登壇いただいた際には、ご自身のコレクションの生玉人形をお持ちくださいました④。

「これは、昭和初期に購入した生玉人形で、いろんな種類、全部で7体あります。とても傷んでしまってますが、みなさんにぜひ見ていただきたい」。また、「生玉人形は、大阪の名玩で、とてもいい人形。今は減んでしまっているのがほんとうに惜しい。現在こうして復活の機運が出てきて、私はとても喜んでるんです」と語られました。

露伴・紅葉と
上町台地の西鶴墓

今昔フォーラム第9回では、「上町台地発、“本”をめぐる時空の旅へ」と題して、肥田先生に基調講演をお願いしました。

先生の膨大な知識の中から、「明治時代の幸田露伴★と尾崎紅葉★、後に日本を代表する明治文学の代表的作家の二人が期せずして、大

阪の上町台地の誓願寺の井原西鶴のお墓に、青年時代にお参りに来たことを中心にして、上町台地に関するお話をさせていただきます」ということで、先生が伝えたいと考え厳選されたトピックをご紹介します⑤。

肥田先生は、明治の近代文学誕生の経緯に迫られ、「(露伴と紅葉の)二人が日本の伝統文学の中から探り当てて、辿りついたのが、西鶴の作品でした」/「これから新しく文学をつくるときに、文体としては、西鶴を基にして、そこから明治の新しい文体をつくらうと決心したんです」⑥と。



肥田先生手作りのレジュメ(「上町台地 今昔フォーラム」第9回)⑤
上町台地 今昔フォーラム Vol.9ドキュメント④



さらにその伏線として「曲亭馬琴★が西鶴の墓に参ったその一年前に、あの大田南畝・蜀山人★が、西鶴の墓を訪れています」/「(紅葉も露伴も)馬琴の京大坂の旅行記『羈旅漫録(きりまろく)』」⑦を読んでい

もっと評価されるべき
暁鐘成

さて、「上町台地 今昔タイムズ」第10号では、近世末期の大坂が生み出した才人・暁鐘成に光を当て、特別編集の「暁鐘成のしおり」③を作成しました。

肥田先生を筆頭に、本日のゲストの橋爪節也先生、明尾圭造先生をはじめ、8名の多分野・多世代の研究者の方々のお話を採録し、鐘成の世界をご紹介します。

そのなかで、肥田先生は「幕末の頃の大坂でもっとも精力的に著述や出版活動を行った人が暁鐘成です。彼が著述や絵師として関係した本には、地誌や随筆をはじめとして、演劇書の類も多くあり、教訓書、実用書から戯作の滑稽本、噺本など、専門的なものから娯楽本まである多彩さです」と語られ、「(鐘成が)32歳の時に出した『澱川兩岸勝景図会』⑧は、私が一番好きな本です。色刷りがきれいで天満橋上流から肥後橋までの大川沿岸の様

露伴と紅葉が西鶴の墓に参ったことを記した読売新聞「百年の大阪」の記事(昭和41・1966年)⑥



「羈旅漫録」に記載された西鶴墓の図⑦

子を細かく美しく画いています」とも。

さらに、その人柄に触れ、「鐘成は当時では珍しい愛犬家で、『犬の草紙』や『犬狗養畜伝(けんくようちくでん)』を書いています。天保6年、彼は愛犬の皓(しろ)を連れて奈良に向かう途中で賊に遭遇、その際に皓が命を落としたのを悲しんで、天保山に碑を建てています」/「大阪の風流壇で活躍した生田南水★が、この鐘成のことをたいへん尊敬していました。難波の瑞龍寺に暁鐘成翁墓の碑を建てています。ちなみに、この碑の台座も犬の形でした」⑨と。

生田南水の存在についても、忘れていることを惜しまれ、本来もっと評価されるべき人だと繰り返しおっしゃっていました。

肥田青年を支えた「上方」

「上町台地 今昔タイムズ」第13号⑤では、「モダン大阪にきらめいた若き才能たちの光跡」を追いかけてきました。

そこで先生が第一にあげられたのが「郷土研究 上方」を発行した南木芳太郎★です。「上方」は若き肥田先生を支えた雑誌でした。

「大阪大空襲で島之内のわが家も焼けて何もかも失くしたうえに、私は戦後、十年の長きにわたる闘病を強いられます。その苦しい日々の中で、貪るように読んだのが、叔父が保存していて貸してくれた全冊揃いの「上方」でした」/「当時は

その通読だけが心の支えとなり、のちの私の人生を方向づけるものとなりました」と。

続けて、「南木芳太郎が雑誌「上方」を発行し始めたのは昭和6年。私はまだ子ども時分でしたが父が購読していたのを覚えています。表紙には、長谷川貞信が幕末～明治の大阪の風景・風俗を描いた美しい木版画が貼られていました」とも。

そして、注目すべき一枚の写真をご紹介してくださいました⑩。

「南木芳太郎は、昭和14年4月の「上方」第百号の巻頭に、明治35年に撮った関西文学同好会の若者たちの写真を載せていま

す」/「37年前のこの光景が、南木にとっては原点の一つだったのかもしれない」とおっしゃっています。

南木芳太郎20歳、27歳の与謝野鉄幹★も写っています。そして、若き南木の隣にるのが、心斎橋で書店・金尾(かなお)文淵堂を営んでいた金尾種次郎★22歳です。

気鋭の出版社、金尾文淵堂

今昔フォーラムでも、「金尾文淵堂は江戸時代からある本屋で仏教の本などを出していました。明治時代になると、主人の金尾種次郎が非常に新しものがり屋で、当時の文学青年たちと仲良くして「小天地」と



暁鐘成「澱川」兩岸勝景図会」の「難波橋納涼」の図⑧



暁鐘成翁墓碑(瑞龍寺)⑨



「上方」100号の巻頭写真⑩

★**曲亭馬琴**(きよくてい ばきん、1767～1848)は、江戸時代後期の読本作者。代表作『南総里見八犬伝』など。
★**大田南畝**(おおた なんぼ、1749～1823)は江戸・天明期を代表する文人・狂歌師で、別号蜀山人(しょくさんじん)。1801年大坂銅座に赴任。
★**生田南水**(いくた なんすい、1860～1934)は、国学、和歌、俳句などに通じた粹人。女流画家の生田花朝(かちょう)の父。
★**南木芳太郎**(なんぎ よしたろう、1882～1945)は、郷土史家。上方郷土研究会を創立し、昭和6(1931)年機関誌「上方」を創刊。151号まで刊行。
★**与謝野鉄幹**(よさの てつかん、1873～1935)、歌人。本名は与謝野寛(ひろし)。妻は与謝野晶子。
★**金尾種次郎**(かなお たねじろう、1879～1947)は、出版人。大阪心斎橋筋の金尾文淵堂に生まれる。大阪と東京で美装本の版元として一時代を築く。



雑誌「上方」、表紙は上方風俗や事件を描いた長谷川貞信の版画



「大阪名勝図絵」の巻之壱、金尾文淵堂が編集出版 ⑪



「手紙雑誌」第1巻第2号（明治37・1904年4月20日） ⑫



郷土研究「上方」70号の表紙に描かれた「菰菊庵」の図 ⑬

★与謝野晶子（よさの あきこ、1878～1942）は、歌人、作家、思想家。堺市出身。1900年から『明星』誌上に短歌を掲載。翌年『みだれ髪』を発表し反響を呼ぶ。同年、与謝野鉄幹と結婚。日露戦争時に発表した詩「君死にたまふことなかれ」や『源氏物語』の現代語訳なども著名。

★西行（さいぎょう、1118～1190）、平安末・鎌倉初期の歌人・僧。俗名は佐藤義清。出家のち、各地を旅して、自然と宗教が一体となった境地を詠む歌を残した。

※資料 ④⑤⑥⑦⑧⑫の提供は肥田先生。
②③⑨⑭は、国立国会図書館デジタルコレクションより。



「上町台地 今昔タイムズ」第17号①

か「ふた葉」とか新しい文芸雑誌を出したり、薄田泣菫の『暮笛集』を出版したりしています。ともかく若い新しい文学者と一緒に新しいことをしようとしていた本屋さんです」とお話ししてくださいました。

さらに、上町台地との関係に連れ、「明治 36 年に大阪で第五回内国勧業博覧会が開催されます。そのときに大阪の金尾文淵堂というところが、大阪案内の本として1月に『大阪名勝図絵』の巻之壱というのを出しました」⑪／「この一巻が上町台地のことだけを紹介しています」と。

種次郎は、「摂津名所図会」に代わる明治の新しい名勝図会をつくらうとしたのですが、販売が振るわず一巻で終わり、予定していた全5巻は幻となりました。しかし種次郎は奮起します。肥田先生は次のように評価されています。

「（金尾文淵堂は）美しい造本の良書を出す出版社として一時代を築いていきます。特に与謝野晶子★の本の代表作は多くが金尾から出ていますが、その装丁もみな素晴らしい。晶子の第二歌集『小扇』をはじめ、他所から出ていた処女作『みだれ髪』も再版し『新訳源氏物語』も出している。その関係は長きにわたり、親しく深いものでした」と、晶子の創作を支えた種次郎の存在に言及されています。

晶子と鉄幹の相聞の舞台

先のフォーラムで、「上町台地 今昔タイムズ」第17号につながっていく、上町台地と歌をめぐる印象的なエピソードをご紹介くださいました。一つは、与謝野晶子と鉄幹の相聞（そうもん・あひぎこえ）の舞台としての上町台地です。

「手紙雑誌」⑫に掲載された鉄幹の明治32（1899）年の葉書に、この一首を見出されたのです。

「きぬ傘のあかきむらさき品はあれど 妹にきせんは白菊の花」

「（鉄幹の葉書に）「高津祠外（こうづがい）に菊を見て」と書いてあり



西行物語絵巻の「津の国の～」の部分 ⑭

ます。高津さんのほりで菊を見て、歌を詠んだ」のだと。

さらに、「高津さんの表門を出て東へ行く、谷町筋を越えたあたりに菰菊庵（がみぎくあん）という菊の名所がありました。明治時代、ここには秋になったら、鉢植えの菊がきれいに並べられた。赤い毛氈を敷いた床几がずっとあってね」／「雑誌「上方」70号の表紙に長谷川貞信が菰菊庵の絵を描いています。その絵を見るだけで賑やかな様子がよくわかります」⑬とお話しくださいました。「鉄幹がそこで詠んだのがこの白菊の花の歌です」と続きます。

「「きぬ傘」は絹を張った傘で、貴人に差しかける傘、それを差し掛けるように、赤や紫の美しく咲いた菊はあるけれど、凜とした白菊こそを我が愛しい人にかざしたいのだという歌です」／「では、その妹とはいったい誰なのか」と。

そして、「久しくも京大阪に帰らぬを しら菊さけば嘆かるゝかな」晶子が明治44年に詠んだこの歌を、先生は古い新聞の中に見つけられたのです。

「私は、晶子の歌をずっと見てきて、この歌を見つけたときに、うわっと叫びました。鉄幹と晶子、この二人の間に交わされた何とも言えん思いや情愛が浮かび上がってきます」と、熱く語られています。

「晶子は鉄幹と駆け落ち同様に家を出て、それ以来、終生堺の家に帰ったことがない。それでも晶子の心には故郷の堺のことがある」／「それで「久しくも京大阪に帰らぬを」というように、ほんとうに京大阪には長く帰らないけれども、白

菊が咲く季節になったら望郷の思いで胸が裂けそうになると」／「妹にきせんは白菊の花」の「妹」は晶子です」と読み解かれています。

西行の名吟は大阪人にとっての喜び

最後になりますが、もう一つ、中世の歌人・西行★が残してくれた大切な歌を紹介くださいました。

「津の国の難波の春は夢なれや 蘆のかれ葉に風わたるなり」

先生は次のように語られました。「大阪湾に向かって広がる広大な葦原、これが大阪の原風景ですが、いまはその葦が枯れて、渺々（びょうびょう）とした景色になっている。しかしそこに早春の明るい日がさして、きらきらと海面が光るわけです」と、目の前に難波（なにわ）の海が見えるかのようなお話しぶりが、今も心に残っています。

新古今和歌集では、冬の歌とされ、枯れ果てた世界を強調する解釈が一般的ですが、「西行物語絵巻」⑭では春風の詞書とともに描かれている歌。先生は冬枯れの蘆の景色の向こうにきらきら輝く春の海を見ていらっしゃいます。

「かつて見た美しい光景が夢のように思い起こされる」／「この名吟の残されたのは、我々大阪の人間にとって、なんとうれしいことではないでしょうか」とも。

戦災で大切ななにかもを失われ、長い闘病生活を経験された先生の人生にも重なり、その先に光を見出されていることを、この西行の歌とともに改めて心に刻みたいと思います。



<メモリアルトーク 第2部>

肥田先生の語りを振り返り、なにわ文化の“粋”に触れる・語り継ぐ

ゲストスピーカー（順不同・敬称略）



橋爪節也
（大阪大学総合学術博物館 教授・文学研究科教授兼任）



明尾圭造
（大阪商業大学公共学部教授・商業史博物館主席学芸員兼任）



滝北 岳
（読売新聞大阪本社編集委員）

司 会 弘本由香里（大阪ガスネットワーク CEL 特任研究員）

生まれ育った島之内、母校・道仁小学校をめぐる縁。若き日の図書館での記憶、大学で深い知を授かった日々。高津高校同窓のつながり。やがて、かけがえのない展覧会や書籍等へ、豊かな実を結んでゆきました。肥田先生との出会いに遡り、その関係性を振り返ります。

弘本由香里 ゲストのお三方お一人おひとり、それぞれの立ち位置から、まずは肥田先生との出会い、その後のご関係、そこから生まれたものなど、ご紹介いただければと思います。

橋爪節也

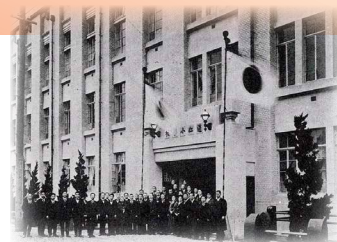
大阪のまんなか、島之内・道仁小学校の大先輩

私は、肥田先生と同じ大阪・島之内に生まれ育ち、大阪市立道仁小学校★（現・大阪市立南小学校）の卒業生として、先生の後輩にあたります。島之内は大阪のまんなか、船場の南側に位置し、北は長堀川、南は道頓堀、東西を東横堀と西横堀に囲まれた地域です。現在用いられる町名の中央区島之内よりも広がった。その島之内に、明治6年（1973）に開校した道仁小学校がありました。3階建て地下1階の校舎でした。市内の古い小学校は、地域の方々の



道仁小学校跡地碑と、明治初に学校創立に尽力した肥田弥兵衛氏の顕彰碑が、今も学校跡地に残る。

★道仁（どうにん）小学校は、かつての南区南綿屋町12（現中央区島之内2丁目12）にあった小学校（昭和62・1987年に近接2校とともに南小学校に統合。跡地には島之内図書館他が入る施設が建つ）。明治6（1873）年の創立に際しては、当時区長を務めていた肥田弥兵衛が校地選定に尽力し、多額の建設費を寄付。その顕彰碑は、明治29（1896）年に建てられ、今も跡地の東南角に残る。



道仁小学校のかつての校舎（『南区志』1928年より）

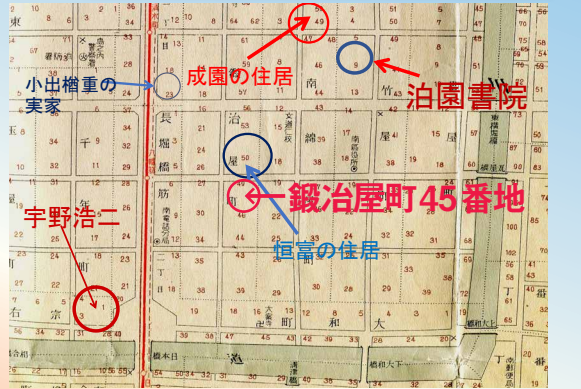
寄付で建てられ、みんな立派だったんです。私も肥田先生もここで勉強しました。小学校の大先輩です。

鍛冶屋町45番地の文化的密度

当時の島之内地域には、文化人がたくさん暮らしていました。例えば、日本画家の北野恒富★のアトリエがあったり、女性画家の島成園★の住まいもありました。小説家の藤澤恒夫★の泊園書院もあった。当時、肥田先生のご自宅は島之内の鍛冶屋町45番地にあったので、北野恒富の住居のすぐ南あたりになります。

道仁小学校には夜学もあって、界限で働く子どもたちも通っていた。洋画家の小出檐重★のところにお梅という下働きの娘がいて、通っていました。校庭の隣にある長屋の右端が北野恒富が住んでいた家で、恒富が東大阪に移った後、小出がそこへ移っ

★北野恒富（きたの つねとみ、1880～1947）は、明治から昭和前期にかけて、大阪画壇の中心人物として活躍した、浮世絵師、日本画家。金沢生まれ、本名は富太郎。恒富風の美人画ポスターなどで人気を集めた。
★島成園（しま せいえん、1892～1970）は、大正から昭和初期に活躍した女性日本画家で、恒富の弟子。堺市生まれ。



肥田先生の育ったご自宅は、鍛冶屋町45番（恒富住居の南）。文化的な密度が濃厚な地域。道仁小学校は南綿屋町12番（恒富住居の北東）にあった。

た。お梅さんもそこにいたわけですね。第7回二科展で二科賞をとった小出の《少女お梅の像》（1920年、ウッドワン美術館所蔵）のお梅ですね。この長屋は、僕の子どもの頃にもありました。

小説家の藤澤恒夫さんも道仁小学校の先輩です。それから道仁小学校は、終戦直後に大阪市立大学が使っていたことがあったそうで、その時、開高健らもそこで勉強していたらしいという話を聞いたことがあります。肥田先生は、道仁小学校の出身者として深い島之内愛、大阪愛をお持ちでした。

文人の研究を介して先生に出会う

肥田先生の業績を初めて知ったのは、東京藝術大学の大学院で日本美術史を学んでいた時です。先生は大阪府立中之島図書館の紀要（1971）で「柳里恭佚文（りゅうりきょういつぶん）」という文章をお書きになっていた。柳里恭は江戸時代の文人、柳沢淇園★のことで、私の修士論文のテーマでした。肥田先生との最初の出会いはこの論文です。その後、先生が自分と

★藤澤恒夫（ふじざわ たけお、1904～89）は、昭和期の大坂を代表する作家。肥田家に近い南区竹屋町で育つ。
★小出檐重（こいで ならしげ、1887～1931）は、大正から昭和初期に活躍した洋画家。大阪・島之内出身。名随筆家。
★柳沢淇園（やなぎざわ きえん、1703～1758）は、江戸時代中期の文人画家、漢詩人。柳里恭とも名乗った。大和郡山藩の重臣。文人画の先駆者のひとりで、詩文、和歌、三味線など多芸多才の風流人として知られた。



大阪のまん中 心斎橋から“大阪”の美術を眺める。
大正14年(1925)、市域拡張で大阪市は、東京市を抜いて日本一、
世界第6位のマンモス都市に成長。華やかなモダンイズム美術が開花した。



「大阪人」モダンイズム
心斎橋号

同じ島之内の人だとい
うことがわかってくる
わけです。

心斎橋愛の発露 「モダンイズム心斎橋」

先日開館した大阪中
之島美術館が、まだ大阪市立近代美術
館(仮称)建設準備室の段階で、長堀通の
三休橋の旧出光美術館・大阪のあとを借
りて、「心斎橋展示室」と言っていた時代の
ことですが、平成17(2005)年に「モダン
イズム心斎橋」展★を開催しました。この時、
先生にはいろいろとお世話になっています。

同展に合わせ「大阪人」という雑誌で
「モダンイズム心斎橋」を特集し、巻頭で肥
田先生が語られています。そごう百貨店の
1階エレベーターを飾った螺鈿漆細工の
扉なども借りて展示しましたが、大丸関連
の資料の数々は肥田先生からお借りしま
した。広報誌「だいまる」や、心斎橋筋のパン
フレットなどをお借りして以来、私もこの
手のものが欲しくなってきた何点か購入し
ました(笑)。

この時会場で、天才作曲家 貴志康一★
研究家の毛利眞人さんが蓄音機コンサ
ートを開催したとき、肥田先生は、最前列
の中央正面に座られて、熱心に聴いてお
られました。展覧会での先生の心斎橋愛、
島之内愛の発露を目の当たりにして共感
しました。

この後、私が出した『モダン心斎橋コレ
クション』(国書刊行会)という本がありま
すが、ここでも肥田先生の所蔵品をお借
りて、掲載させていただいています。

★モダンイズム心斎橋展：「大大阪」誕生80年を記念し、
大阪市立近代美術館建設準備室の心斎橋展示室で、平成
17(2005)年1月15日から3月21日に開催。同展に合
わせて、雑誌「大阪人」(2005年2月号)は「モダンイズ
ム心斎橋」を特集。肥田先生も巻頭に登場している。
★貴志康一(きしこういち、1909～1937)は、日本のクラ
シック音楽の草分け的存在。ベルリン・フィルのフルト
ヴェングラーのもとで指揮者・作曲家としての才能を開花。



展示された「だいまる」などの雑誌は肥田先生からお借りしたも

肥田家の文化的な気風と高津宮

私が心斎橋筋で知人たちと「新菜箸本
撰(しんさいばしほんえらみ)」をつくった際にも、
肥田先生に大いにご協力いただきました。
これは、後ほどお話しさせていただきます。
また、「彷彿月刊」絵葉書国人物誌(仿
徨舎)に肥田先生のご親戚の肥田溪楓★
についての執筆を依頼されました。溪楓
は古典籍を収集し、自邸にモダンな書庫
「楓文庫」を開いた人物で、この人が出
していた趣味人たちの雑誌で「あのな」とい
うのがありました。その時にも先生にいろ
いろと教えていただきました。

高津宮とのご縁も深い。参道に北野恒
富の筆塚が建てられている。恒富にはひ
ときわ深い想いがありだったと思いま
す。高津宮の玉垣(石柵)には「肥田熊蔵」
など、一族の方の名が刻まれているものも
見られます。

明尾圭造

出会いは小・中学生時代、
中之島図書館で

私と肥田先生の関係性は結構古いんで
すね。最初に先生をお見かけしたのは、お
そらく肥田先生が中之島図書館におられ
た時のことです。私は小・中学生の頃でし
ょうか、夏休みになると、夕陽丘や中之島図
書館へ勉強をしに行きました。合間に一般
閲覧を覗くと、前垂れをした和服姿の変
わった人がいらっしやった(笑)。当時の
私は、肥田先生のお名前とお顔とは一致し
ませんでしたが、初めて拝見したのは中
学生、いや小学生の頃だったと思います。



高津宮の玉垣(石柵)には「肥田熊蔵」(祖父)の名が。

★肥田溪楓(ひだ けいふう、1877
～1948)。虎屋信託の取締役を務
める一方、古典籍を蒐集。大阪市
南区の自邸に洋風のモダンな書庫
を竣工して「楓文庫」を開く。雑誌
「あのな」を創刊。表紙のかぼちゃ
は川崎巨泉の絵。肥田先生とは、
祖父が溪楓と従兄弟の関係。



展覧会に關係して開催された蓄音機によるレコードコンサート
※この頁の図版資料の提供は橋爪節也氏

関西大学で先生の講義を受ける

その後、私は関西大学に進み、大学院
の国文学の講義で、昭和62(1987)年の4月
に肥田先生を訪ねました。私は史学科に在
籍していたため、単位にはならないので
すが、直接先生のところへ伺ってお願いした
わけです。そうしたら、いやぁ奇特な人がい
てはるなあ、っていう感じで、受け入れてく
ださった。その後、正規の受講生2人が途
中で出席しなくなって、結局、天ぶら学生の
私は先生と一対一で授業をしていただいた。
そこでは、菅茶山★という備後の漢詩
人の講読をしていました。先生が言うには、
ちょうど最近関大の図書館に茶山の書状
を購入したものがあるので、それを一緒に
読みますか、ということでした。

時には、先生がわざわざ私の自宅に電
話をかけてきてくださって、明日はちょっ
と大学へ行かれへんのやけども、心斎橋
の喫茶店でどうだっか、っていうことでね、
大学外の喫茶店でケーキを食べながらと
か、いろんな所で話をしていただいた。学
生時代にそんな風な授業を受けたという
思い出があり、幸せでしたね。

「阪神間モダンイズム」展を支えた知

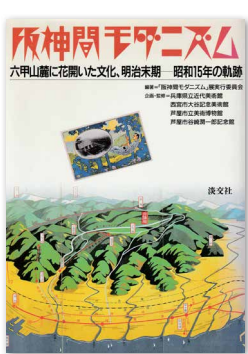
私の前の職場は、芦屋市立美術博物館
でした。阪神・淡路大震災後に、同館で
阪神間モダンイズム展★を開催しましたが、
その際に、先生のご自宅まで伺いをして、
さまざまな雑誌などをお借りしました。さ
らには、当時の人々の人間関係を紐解く
上で、やはり肥田先生の知識というのはと
ても貴重なもので、大変参考になりました。



★菅茶山(かん ちゃざん、1748～1827)
は、江戸時代後期の儒学者・漢詩人。
★阪神間モダンモダンイズム展は、平成
9(1997)年に兵庫県立近代美術館、
西宮市大谷記念美術館、芦屋市立美術
博物館、芦屋市谷崎潤一郎記念館の4
館が阪神間のモダンイズムを統一テーマ
に共同開催。

誰もあそこまでご存知の方はいらっしや
らないわけです。

平成8(1996)年の終わりぐらいから平成
9(1997)年にかけて、私は先生のところによ
く伺いしました。その折に、先生から阪
神間モダンイズム展用に資料をお借りした
のですが、少しずつ自分の鞆に入れて、100
冊以上は持ち帰らせていただいたでしょ
うか。それらの資料については、目録をつく
つてお返しをさせていただくという形で。



阪神間モダンモダンイズム展の
図録表紙

同展が契機に
なって、阪神間の
出版界に関して
『モダンイズム出版
社の光芒—プラ
トン社の1920年
代』という本を私
が出させていた
だいたのも、ひと
えに肥田先生の
お力添えがあつてのことです。

それから展覧会があるたびに先生のお
世話になってきています。私は、結局肥田
先生に公私ともに道をつけていただいた。
自分のゼミの先生ではないんですけども、
ゼミの先生にも増してお世話になった
方で、肥田先生とはそういう関係でした。

どこまでもスマートな 立ち居振る舞い

私は、10代の頃に初めて先生をお見かけ
し、図書館の受付のところで着物姿の着流
しで前垂れをして、関連の本を出してはっ
た姿が印象に残っています。中之島図書
館におられる時から、立ち居振る舞いがス
マートで、そういう意味でも有名な方でした。

スマートでもうひとつ思い出したのが、
先生は朝のラッシュがとてもお嫌いだっ
たということです。ご自宅の池田から、始
発の次ぐりの電車に乗ったら、座ってい
けまんねん、と。とにかく人より早い時
に行って、仕事が終わったらずっと早く帰
ってくるのだとおっしゃっていました。その意

★OSK、大阪松竹歌劇団(現在はOSK日本歌劇団)は、
大正11(1922)年に松竹楽劇部として創設。翌年5月、大
阪松竹座で第1回公演「アルルの女」。

★織田作之助(おだ さくのすけ、1913～47)は、大阪を
代表する作家。代表作に『夫婦善哉』『木の都』など。肥
田先生は高津中学(旧制)近くの楞厳寺で行われた葬儀
に参列した思い出を『再見 なにわ文化』で語っている。

味でもスマートなお方でした。

滝北 岳

すごいお方、高津高校の縁で
取材を申し込む

私の場合はお二方と比べると、まだ浅
いお付き合いと言うべきかもしれません。
私は、読売新聞大阪本社で文化・生活
部というところにおりました時に、いろん
なところで肥田先生のお名前をお聞きして
いました。なんか大阪にすごい人がいては
るということでした。

先ほど、先生の心斎橋愛や島之内愛が
話題になりました。先生は大阪府立高津
高校を中退されているのですが、実は高
津愛も強くお持ちでした。私も高津高校の
出身で、先生は高津の先輩だということも
お聞きしまして、それで思い切って先生に
手紙を出しました。そのお返事が返ってき
まして、平成25(2013)年10月に初めてお
会いしたわけです。

初めは、取材内容を原稿にすることとい
うことでなく、ただお話をお聞きしたん
ですけど、その時に本当にびっくりしたん
ですね。雑誌の「上方」のことからOSK★のこと、
実は、私はほとんどそういうことがわから
ない人間なんですけど、先生はとうとうと喋
られて、しかも昨日のことにように鮮明に思
い出されるわけです。例えば、織田作之助★
の昭和22(1947)年のお葬式のことも、ま
るで昨日の事のようにお話しになって、こ
れはすごいお方だなという風に思いました。

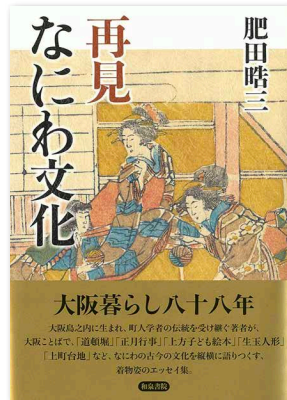
連載から、『再見 なにわ文化』出版

その後、奈良県大和郡山市の水木十五
堂賞★を受賞され、私も肥田先生の講演
会などに参加するようになって、やっぱり
この方のことを何とか残したいという思
いが募りました。たまたまですが、当時の上
司も賛同してくれ、新年度に向けた企画と
して、先生の聞き書きの記事の連載が始
まりました。それが平成27(2015)年の4月
のことでした。

★水木十五堂(みずき じゅうごどう、1865～1938)
は、大和の歴史や地誌を研究。漢詩、和歌、俳句、書
画、狂歌から茶道、演劇等を通じ、多くの文化人と交
流。幅広い分野で収集を行い「水木コレクション」とし
て受け継がれている。肥田皓三先生は、大和郡山市創
設の水木十五堂賞の第2回の受賞者。

最初は何のぐらい続くのかなと思って
いましたが、結局4年間。とにかく先生のお
話が面白い。お話を聞きながら、レコー
ダーで記録し、それを文字起こしすると、
起承転結がしっかりしていますので、ある
程度の分量で1回分にちゃんとなっている。
ただ問題はこっちに知識がまったくないも
のですから、いろいろ調べました。ネット
にも載ってないような話ばかりなので、図
書館に通ってあれこれ調べていたことを
覚えています。

そのうちの3年分ぐらいを本という形で
『再見 なにわ文化』という連載のタイトル
をそのまま使って出版したんです。3年ほ
ど前に出させていただきました。

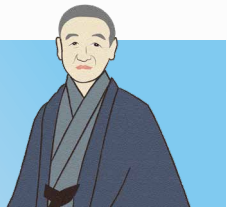


滝北岳さんが肥田
先生に取材した新
聞連載をまとめた
書籍『再見 なにわ
文化』は和泉書店
から平成31(2019)
年2月に出版。

この時、余談ですが、私はちょっとひね
くれているもんですから、「再見」という言
葉には、再び見るという意味のほか、中
国語で言うと「さようなら」っていう意味
も含まれているので、もう減びゆく大阪文
化について最後にお話をするという意味も
込めているんですよって言ったら、肥田先
生の顔色が変わりましてね。ほんならこの
タイトルやめや、みたいなことをおっしゃ
って、やっぱり、さようなら、っていうよう
な言葉とか、そういう否定的な言葉で大阪
を捉えられるのが、心底嫌だったのだら
うと思いました。ひとまず、そのようなこ
とでございます。

弘本 お三方それぞれに、肥田先生と
のご縁についてお話くださり、ありがとう
ございました。出会いの時期やきっかけは
さまざまですが、人生を方向付けるよう
な、濃密な時間をともにされてきたこと
に感じ入りました。引き続き、印象に残
るエピソードを通して、肥田先生の唯一
無二の存在感、受け継いでこられた世界
についてお話をうかがっていただければ
と思います。

誰よりも深く愛されたなにわの風土・大阪の文化。趣味性と学術性を尊ぶ、町人学者の系譜に連なる。
島之内言葉の優しい響き、着物姿に貫かれた生き方・スタイル。記憶と体験に裏打ちされた知の力。
想い出の資料、忘れえぬエピソードとともに掘り下げていきます。



同人誌「新菜箸本撰」と肥田先生

橋爪 肥田先生との関係では、私たちが出した同人誌にご寄稿をいただいていた。さっきも話に出ましたが、「新菜箸本撰」★というもので、心斎橋筋の古書店・中尾書店の中尾靖さんとデザイナーの荒木基次さんとでつくりました。

なぜこれを出したかというと、当時「大阪春秋」とか「上方芸能」とか、大阪の雑誌もいろいろとあったのですが、自分たちの興味のある部分が乏しい。さらに大阪の文化を振興するにはどうすればいいだろうかとの話になったとき、ぼやいていてもしょうがないから、もう自腹をきって何かやった方がいいということになったわけです。

結局、自分たちの想いを込めた同人誌を出すことにしました。以前に心斎橋筋商店街が主催で心斎橋に関する展覧会があり、『心斎橋筋の文化史』という本を出すような動きがあって、本当は心斎橋研究的な分厚い冊子にしようと思いましたが、それでは予算的にも編集の労力でも力が尽きてしまう。そこで簡単な形式でつくったら長く続けるのではないかと思い、綴じない冊子の形にしました。イメージとしては、全集なんかについている付録みたいな体裁でいいんじゃないかとなった。今、11号まで出ています。

内容は本を中心とした雑誌です。元々心斎橋筋は出版文化の中心地で、江戸時代からいろんな書店があって、たくさん書籍を出版していました。この同人誌は、そうした文化に関する記事を中心とした冊子としました。肥田先生にもご寄稿いただいたのですが、出版文化は、言うまで



同人誌「新菜箸本撰」(平成18・2006年)創刊号(付録)と第2号

もなくお得意の分野でした。

創刊号の原稿では、なかなか面白いのですが、昔、大丸出版という本屋があって、そこが出した雑誌「楽想」についてのもの。音楽に関する雑誌で、肥田先生はジャズ評論家でもありました

が、雑誌「楽想」は、どっちかというところクラシックレコード系でした。先生の前稿の最後を見ますと、こんな内容です。

「思い起こすのは、昭和二十四年私は高校二年生であったが、創元社の百花文庫で出たばかりの小林秀雄★の『モオツァルト』に熱中した。薄い本だったので教科書とノートと一緒に毎日持ち歩き、分らぬまに暗証するほど読んでいた。あほらしいような青春の日が回想される」

若き肥田先生が、いろいろなご本を読んでおられたことが分かって面白い。『モオツァルト』には、小林が奈良の志賀直哉のところに行ったりしていた時期、道頓堀を歩いていると突然モーツァルトのト短調交響曲の終楽章が頭の中で鳴りひびき、近所の百貨店にレコードを買いに行っただけでも、売ってなかったというようなエピソードがある。

★小林秀雄(こばやし ひでお、1902～1983)は東京生れの作家、文芸評論家。終戦の翌年「モオツァルト」発表。

★同人誌「銀」は、肥田先生の父親の郁三氏が正10(1921)年21歳の時に、弟と従兄弟・友人たちと創刊し4号まで出した。北野恒富の子息の北野以悦や弟子の樋口富磨らが表紙画を描くなどした(その経緯については肥田先生が「新菜箸本撰」11号へ寄稿)。

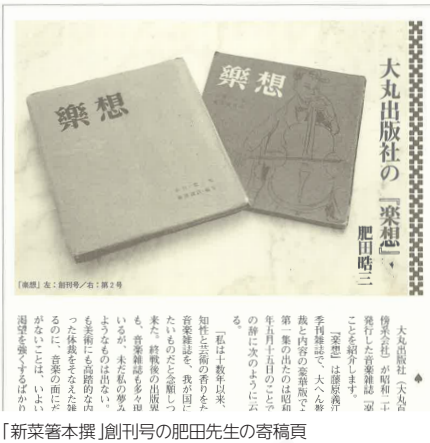
ソードがある。

その時代、現実の道頓堀の街で鳴っていたのは、何ていうかダンス音楽みたいな感じの音楽でしょうね。『モオツァルト』を持って肥田先生が歩いていた姿を想像すると面白いですね。

先ほどの鍛冶屋町の45番地の肥田先生のお宅ですけど、その近くで北野恒富の弟子たちが出していた同人誌「銀」★があっ

て、先生はそれもお持ちでしたので、それについても書いていただいた。

各号で一応特集も組んでいるんですけど、寄稿の内容はまったく自由で結構ですと、特集とは無関係に先生の書きたいように書いていただきました。



「新菜箸本撰」創刊号の肥田先生の寄稿頁

奇特なこと“趣味性と学術性”

明尾 「新菜箸本撰」が出た時に、肥田先生はおっしゃってました。こんな奇特なことするのは、もう橋爪さんぐらいしかおれへんと。

なんというか、大阪の人というのは、昔から儲けても全部ひとりで抱えて出さないとかじゃなくて、やっぱり自腹切ってやるところがあるんですね。中之島の図書館や中央公会堂にしたって、住友とか株で儲けた人とかの寄付ですけども。何か文化に関して、浄財を撒くというようなところが大阪の人にはある。ところが、今は大阪人はがめつくって儲けたら儲けるだけというイメージが強い。それは肥田先生もおっしゃってました、本当の大阪は、そういうのとはまったく違うもんや、と。

★長谷川貞信(三代目)(はせがわ さだのぶ、1881～1963)は、明治時代から昭和時代中期にかけての大阪の浮世絵師。郷土研究誌「上方」の表紙の大半を父の二代目貞信とともに担当。昭和15(1940)年に三代目を襲名。

★菅橋彦(すが たてひこ、1878～1963)は、日本画家。なにわ風俗を愛し、情趣ある風俗画で「最も大阪らしい画家」とも呼ばれた。

橋爪 それで思い出したけど、さっきも話に出た「上方」という雑誌が南木芳太郎によって、どういうふう編集されたかということと言うと、学術性も大事にするけれども趣味性を重んじるとしていました。「上方」の表紙に、長谷川貞信★の木版画を貼り付けるというようなことをした。これは、やはり趣味性なんです。

こうした趣味性と学術性が合わさったあり方、これを私なんかは、ある意味で、いちびりだと思う。だから、我々の同人誌でも、学術的だけどいちびっているわけです。趣味的に楽しんでいるみたいなものをつくろうとしたわけです。同人誌の創刊号には、タイトルが「新菜箸」なので特別付録に割り箸を付けました(笑)。これは、ほんまに割り箸の袋で、そこに箸をコピーして入れ、ハンコを作って押したものです。ただそれだけなんです(笑)。でも最近では、我々には趣味性だけしかないのではという疑念も禁じ得ない(笑)。

弘本 なにか、幕末の暁鐘成あたりから、ずっと続いている系譜って感じがしますね。

先生の着物姿に貫かれた実践

橋爪 変な言い方ですけども、そういうことについては、実際に自分で実践しないと分からないことがあるんやと思う。

肥田先生も、常に着物を着ておられたり、その意味で、先生も何かを実践してはるのではないかと思うんです。自然体なんです。自然体でこの時代にあの形でずっといることの意味は絶対何かがあるでしょう。意識はされていないのだとも思いますが。

明尾 例えば、肥田先生もお好きで、私もずっと研究している日本画家の菅橋彦★ですけど、この人も着流し着物姿で西洋のパンツをはいたことがないという方でした。やはり肥田先生の場合も、ある意味で、それを目指さなければなかなか続かないのではないか。橋爪さんがおっしゃったけれど、多少は演じておられるところもあったんじゃないかとは思いますが。

★郷土研究誌の多くは、大正から昭和初年の創刊。各創刊年は、木村旦水「難波津」大正13(1924)年、上田長太郎「大阪叢書」昭和2(1927)年、木谷蓬吟「郷土趣味 大阪人」昭和4(1929)年、南木芳太郎「上方」昭和6(1931)年。

★大大阪の時代、大正後期から昭和初期にかけて、大阪は面積や人口、工業生産額で東京を凌いで日本一となり、近代的な産業都市として発展。大衆文化も花開いた。

橋彦さんは、失われていく、なにわ文化に愛惜の情をお持ちだった。橋彦さんが暮らした時代は現代だけでも、その大阪を、橋彦さんは認めることができないという部分があって、描く絵では人物は全部ちゃんまげ姿なんです。だからそうした想いに肥田先生もどこか共感するところがあったかもしれません。先生のお姿が橋彦さんにそっくりな気もするんです。あの立姿、良い姿勢の肥田先生。

橋爪 今の話で思い出しました。「上方」とか、その前に「郷土趣味 大阪人」とかね、だるまやが出した「難波津」。そういう郷土研究誌的なもの★が出るというのは大阪が「大大阪」★になって、都市が近代的に変わっていく中で滅び行くものをせめて書き留めようというような意識を持っているわけです。南木芳太郎は「上方」の創刊の辞にそう書いている。もうなくなっている、なくなるであろうものを意識してはったのだと思います。

滝北 着物のことですが、奥さんから聞きしたことがあるんです。先生は、闘病されてちょっと良くなった頃に、多分一回だけだと思いますが、仕事を求めて職業安定所に和服を着て行ったらいいですよ。そしたら向こうの職員から、あんた何をふざけてるんやというようなことを言われて、それで日本の民俗衣装を着て行って何が悪いと、奥さんに語っていたらしいんです。明尾 それはいい話ですな(笑)。その点でも中之島図書館は大丈夫だった(笑)。

思い出しましたが、芦屋市立美術館に豊国★の絵の寄贈が入ったことがありまして、初代二代三代とですが、私は詳しくはなかったもんですから、肥田先生にちょっと助けてくださいとお願いしました。先生は、美術館には着物に袴姿で来られたんですけど、いざ資料を整理する時に、ちょっと着替えさせてもらえますか、っっておっしゃって、それで着流しに着替えて前垂れを付けてね。ちゃんと衣装を変えて、全部で三百数十枚だったんですけど、2時間ぐらいの時間で、見る間に仕分けしてしま

★歌川豊国(うたがわ とよくに)は、江戸時代の浮世絵師。初代豊国(1769～1825)の死後、二代目は歌川豊重(生没年不詳)が継ぐ。三代目は歌川国貞(1786～1865)が襲名。

われました。鉛筆でささっと書いて、これ後でワープロでまとめなはれ、と(笑)。
滝北 先生が大学の先生の時には、学生部長とかをやってらっしゃって、メーデーにも袴をつけて行きはったと言いますね。明尾 大学内の先生のお部屋は、そんなに多くない和本が積んであって、それは綺麗にしてありました。ご自宅の方がすごかったですけど、やっぱり本がダートと積み上がっているんですが、角が揃っていません。もう摩天楼のように立っていましたね。それが、どこに何があるか全部ご存知なんですね、次に何うと、その山が微妙に動いているんですよ。

滝北 私の取材の際にも、次にこういうことを話されるという時には、資料を風呂敷に包んで持って来ていただいた。ただ時々どうしてもこれが見つからなんだ、つていうのもありましたね(笑)。

明尾 阪神間モダニズム展を開催した時に、「松竹座ニュース」★とか雑誌類をたくさんお借りしたんですけど、それがどれもとにかくきれいなんです。

先生によると、これは、もう親父の時から、いつも2部もらってまんねんって。一つはちょっと物を書いたりする時に使い、一つは触らずにそのまましまう、きれいなもので折れ一つないというものでした。

橋爪 私も「松竹座ニュース」を集めていてね。肥田先生が持っておられないのがあるらしく、貸してほしいと言われて、お貸ししたら整理されて帰ってきた(笑)。これとこれは持っていないかって、すごいな—と思った。

明尾 きれいなものってことで言うと、立版古★っていう、子どものおもちゃ絵ですけど、これを展観する時、例えば一度切って貼ってつくと、それはもう元には戻りませんでしょう。ところが、お借りしたものは、全然手付かずのきれいなものばかりでした。先生に、途中で切ってつくりたいと思ったことなかったんですか、とお聞きしたのですが、いやこれも全部2部買うてますからね、とおっしゃってました(笑)。



「肥田せんせいのなにわ学」INAX 出版、2005年

★「松竹座ニュース」は、戦前に道頓堀松竹座が出していた、映画プログラムの冊子。印刷はプラトン社。

★立版古(たてばんこ)は、浮世絵版画のおもちゃ絵の一種。切り抜いてノリで貼り組み立てる。「版古」は「版行」で刊行物の意味。肥田先生は子どもの頃からこれに親しむ。昭和41(1966)年、日本浮世絵協会の機関誌「浮世絵芸術」に掲載された「立版古考」は先生のデビュー作。

昔心齋橋筋で丸善があった辺りに、合羽刷★のおもちゃ絵などを専門に売ってるような版本屋があって、そこでよく買うてもらった、という話をされていました。

記憶に裏打ちされた世界の深さ

橋爪 研究的な観点から言うとね、そうした資料などは肥田先生自身にとって同代的なものから、段々と昔にさかのぼっていくわけでしょう。僕らが持つてる例えば「松竹座ニュース」は現役のものじゃなくて自分が生まれる前のものですが、肥田先生の場合、ご自身が生まれている時代のものであれば、その前の明治や江戸時代のものとなると記憶にない世界。こうした資料に対する、先生の想いのグラデーションがどうなっているのだろうかと思えます。どこかまでがリアルなものなのか。ご自分が実際に目にした物事であるとか、その関係性とか、考えると不思議な感じがします。

弘本 先生のお話の中には、お父さんらの記憶もたくさんありますよね。

滝北 先生が特に好きなものの中で、肥田先生が生きた時代からリアルに残ってるというのを考えてみたら OSK しか今はもうない。ほかのものはすべてなくなってしまっている。

弘本 乙三洞（おっさんどう）★の話などもそうですね。もうなくなってしまった。

橋爪 そう森田乙三洞。これも先生から教えていただくとともに、私自身も調べました。昔、鰻谷を歩いてたら「ほんや・乙三洞」と彫った木製の看板が架かっていました。でもどういう所かわからないままでした。その後いろいろ調べると、昔の資料の中に「版画乙三洞」とかが出てくる。それで心齋橋の中尾書店の先代の中尾良男さんにお聞きしたら、乙三洞なら知ってますよという。もちろん肥田先生も知ってたらしい。

乙三洞が一時あった難波の溝之側に十二段家とかエミヤという本屋があったが、当時の書籍や出版文化を考える上で重要だということは、先生に教えていただいた。

明尾 先生の興味は多彩で、ダンスとかにもお詳しくかったですね。ダンスホールとかに、ひょっとして先生も行っってはったんですかとお尋ねしたら、はっきりとはおっしゃれへんかった（笑）。ダンスホールは宝塚にもあったし、尼崎にもあったそうで、資料を先生は結構お持ちだった。

滝北 先生は総じて舞踏はお好きですよ。洋物も和物もどちらも好きやった。河合ダンス★なんかについてもお詳しい。

橋爪 それも島之内発ですね。宗右衛門町のお茶屋がつくったものです。

滝北 いわゆる少女歌劇団のようなものでしょうか。先生ご自身は直接には知らないのだけでも、先生の叔父さんが河合ダンスの資料を集めていらした。だから、これは先生が生まれる前の話ですね。

橋爪 話が戻りますが、「新菜箸本撰」の原稿を調べたら、先生は乙三洞に行っていて、最後に見たのはいつやったとか書かれていますね。

弘本 あ、「ポップン」★についても書かれていますか？



「新菜箸本撰」第3号の肥田先生の寄稿「乙三洞のこと」

橋爪 「ポップン」は、先生の小さい時に買ってもらったそうですね。この「ポップン」は、乙三洞が長崎に発注をしてつくらせたものらしい。

戦後も、乙三洞は、そごうで古書の即売会なんかをやっています。そこで、肥田先生は乙三洞の姿を久しぶりに見て、それが最後になったと書かれています。また後日、先生は、乙三洞の娘さんに先程の心齋橋の展覧会で会う機会があって、あんたお母さんにそっくりですな、と言ってし

まったとか「新菜箸本撰」に書いてあります（笑）。これが、「趣味人」とかね、そういう世界の話ですが、すごい記憶力ですね。

無花果（一軸）会と肥田先生

明尾 今、前に置かせていただいているのは、橋爪さんと一緒にやっている会の芳名録みたいなものです。一人が1本の軸を持ち寄るので無花果（一軸）会★と称して、その出席者は、こういうものに記念の絵とか俳句みたいなものを書くということで、先生にも書いていただきました。

この会は、今まで20回ぐらいはやっているのかな。15回は超えていますね。

橋爪 休んでいた年もありますが、1990年代からやっていますからね。

明尾 最初は大阪の美術倶楽部の大広間を借りてやったんですけど、肥田先生も、面白そうなことやってはるなってことで、そのあとからほぼ毎回来ていただくようになりました。

高津神社の富亭という場所でやりだしてからは、先生には奥さんと一緒に来ていただきました。

それぞれの軸を出品者が説明をしていくんですけど、それを聞きながら、いつも先生は喜ばれましてね。よろしおまん、とおっしゃって、セッティングをしている頃から少し遠目でご覧になったり近場でご覧になったりして、静かにね本当に喜んで見ていただいているなという気がいたしました。

この会は、だいたい書画の会とは言いながら途中でもう飲み会になだれ込むわけです（笑）。

橋爪 毎年、桜が咲いている時にある会だから無花果（一軸）観桜会（笑）。

明尾 みんな、本名ではなく雅号を入れ



高津の富亭

★**合羽刷**（かっぱずり）、木版多色刷りは、色の数だけ版木をつくるが、それを省略した簡易印刷。

★**森田乙三洞**（もりたおっさんどう）は、森田政信が経営した美術雑貨店。大正から昭和初年ころは繁華街の千日前の楽天地南横や難波の溝之側、その後は心齋橋近くなど、何度も場所を変えて戦後まで店は継続した。

★**河合**（かわい）**ダンス**は、宗右衛門町のお茶屋「河合」の主人、河合幸七郎がはじめた芸妓によるレビュー。大正の終りから戦前頃まで活動した。

★**ポップン**は、フラスコ状のガラスの弾力性を利用して音を鳴らすおもちゃ。乙三洞は、図案を自分で作って産地に注文し、「溝之側」の店で売った。肥田先生は小学生の時にそこでポップンを買ってもらったという。

★**無花果（一軸）会**は、高津神社の富亭で催される恒例の観桜会。橋爪節也氏、明尾圭造氏らの美術研究者が中心となり、軸物を持ち寄って自慢し合う(?)ために「無花果（一軸）会」と称して開催。



無花果（一軸）会にて（高津宮、平成29・2017年）

たりして楽しんでいる。先生はストレートでそのまま（笑）、先生そのものが存在感があるので。

弘本 こうした書画の会は、大阪ならではとおっしゃっていましたよね。

明尾 東京の方も興味をお持ちの人は多いと思います。ただ、美術研究をしている人たちは、大学の教員や学芸員を含めて、書画を自分で買って、というのはあまり公では言わない。本当はね買ってはるんですが、でも、みんなが持ち寄ってつて

というのは、大阪らしいんですね。

橋爪 まあそれから雅号をつけることで、自分自身が非日常化しますね。変な号をもつ人は書画を集めても良いが、品行方正な明尾先生は、そんな書画は集めていませんよ、っていう立ち位置だから（笑）。

明尾 当時、乾杯の音頭は必ず肥田先生にとっていただいて、酒宴が始まるわけですけど、考えてみたらあれ以上の密な場所はないわけで、なかなか最近ちょっと控えているのが現状です。

橋爪 伝統的な趣味人★の会というのは、こういう形で昔からやっていたわけです。

明尾 持ち寄る軸は別に高価な物ではなくて、それをもってどういうふうに物語をつけて楽しむかっていうようなことでした。

橋爪 無花果（一軸）会は、その源流的なものなのですね。こうした趣味人の会の精

★**趣味人**（しゅみじん）、「大大阪」時代に、蒐集家であり、凝った意匠の物や本、書画を愛する、ユニークな人たちがいた。森田乙三洞は、その代表格の人物で、だるまや書店の木村旦水や柳屋の三好米吉、おもちゃ絵の川崎巨泉、岸本彩星重人らの多士済々の人たちが相互に交流した。



壱萸（一額）会にて（小大丸画廊、平成31・2019年）

神は、現在、大正イマジユリ学会★のなかにも一部流れ込んでいるわけです。昔の絵葉書のブームとかがありました。紙屑系資料のコレクター研究者が自分らの持つてる資料を見せこするという、別個にあった見せこ会的なものとか書画系のものが微妙に入り乱れていたわけです。

明尾 見せこ会も、だいたい同じメンバーなんです。絵葉書をやった人なんて、新聞社の編集してた人ですけど、新聞社をやめて、今は絵葉書の専門家になっちゃった。

橋爪 最初はみんな若いからね。ところが10年20年経つと、何か恐るべきコレクターみたいになってくるわけ。そういうのは、大阪の戦前に言っていた「趣味人」の世界ですね。実際やってみるとようわからんという実証主義精神で、自ら身を挺して

やっているわけですよ（笑）。

明尾 一軸から派生して最近では額を持ち寄るっていう、これは心齋橋の小大丸の白井さんにご協力いただいて、壱萸（一額）会★も開催しています。必ず一人一つですよと言いながら、守っている人はいない。だいたい橋爪さんが一番多いですね（笑）。

橋爪 良いも悪いも含めてみんな面白がるってところがある（笑）。それで、肥田先生は果たしてコレクターなのかどうか、みたいな観点もあるわけです。親の代から先生に伝わっているものがあるし、ご自身で集めている分もあるけれど、学術資料的な整理は肥田先生がしてはる。そこをどう思います？

明尾 先生のお持ちのたくさんのご本は、研究でお使いになっているんですけど、さっきから話に出ている雑誌類ですね。例えば阪神間モダニズム展の時にお借り

した種々の雑誌とか、さっき橋爪さんから話が出た「あの子」とかね。三号雑誌って言われるぐらいたくさんのものが出ては消えているのですよ。これは留めておかないとなくなってしまう。

以前、肥田先生のところに私がお伺いするたびに、全国から来る古書の目録が置かれていたんです。ある時、これいただいて帰っていいですかって言うと、あんさんいつも置いていてあげるから、とおっしゃって、何う度にもいただいて帰っていたんです。

そうしたら先生が何を注文されているかわかるわけです。先生は小さな丸を鉛筆で付けられる。決して折り目なんて付けない。それを見ると、やっぱり多いのが雑誌ですね。大正から昭和にかけて各地で出されていた雑誌、特に文学系のものにご興味があって発注されていたようです。

弘本 先ほどの「手紙雑誌」とかもそうですし。いろいろ集めていらっしゃる中から、それを常に見ておられて、そこから新しい発見をされている。近年までずっとそうだったなあという印象がありますね。

最後

明尾 先生が何を注文されているかわかるわけです。先生は小さな丸を鉛筆で付けられる。決して折り目なんて付けない。それを見ると、やっぱり多いのが雑誌ですね。大正から昭和にかけて各地で出されていた雑誌、特に文学系のものにご興味があって発注されていたようです。

弘本 先ほどの「手紙雑誌」とかもそうですし。いろいろ集めていらっしゃる中から、それを常に見ておられて、そこから新しい発見をされている。近年までずっとそうだったなあという印象がありますね。

最後の原稿に記された資料

滝北 これは肥田先生の書かれた最後の原稿になると思うんですが、大阪芸能懇話会★で、コロナ禍で集まらないので、近況をそれぞれ知らせてほしいという時に、肥田先生が「三月初旬から七月中旬までに購入又は恵与された新刊書、次の如く」と書き出している原稿用紙があります。

買った分の中にあるのが、梅田書店の「これくしょん」で欠号の11冊分を埋めてはるんですよ。それとか「文楽」の昭和22（1947）年の13冊。そういう雑誌類はかなり集めてらっしゃる。

橋爪 梅田書店の山内金三郎は重要な人物だとも肥田先生はおっしゃっていました。

滝北 先生は、手紙は万年筆で青のインクで書かれるんですけども、こういう原稿用紙に書く場合は鉛筆で書かれています。昔はHBを使っていたんですけどだんだんBになってきて最近そろそろ2Bに変えないかんかなと、おっしゃっていたらしい。

★**壱萸（一額）会**は、新春吉例の一額会と称して近年は毎年1月に心齋橋筋の小大丸画廊（小大丸ビル3階）で開催。参加者が日頃収集の一品を披露する。

★**大正イマジユリ学会**は、大正時代を中心として、イマジユリに関する研究と啓蒙を行う研究者の学会。イマジユリとは、イメージ画像を指すフランス語で、挿絵・ポスター・絵葉書・広告・漫画・写真など大衆的な図像の総称。

★**大阪芸能懇話会**では、雑誌「芸能懇話」を発行。平成元（1989）年6月の創刊以来、肥田先生も度々寄稿されている。



「芸能懇話」に寄せられた肥田先生の最後の原稿

明尾 先生が鉛筆でメモ書きみたいなのをされているのがありますが、何かの紙の裏使いもありましたね。

滝北 先生は筆まめで、コロナ禍の間も手紙が1日に5、6通はあったそうですが、さざっと返事を書かれた。本が届いたらあつという間に読んでしまっ、整理する。その処理能力の高さでも、もういくつになってもすごいところがありました。

明尾 関大図書館の書庫に新しく入ってきた貴重図書とかについては、帙(ちつ)装丁にして表書きを書くのですが、ほとんどが肥田先生の筆の文字なんです。だから、書庫に入ると先生がおられるっていう気がしますね。先生の字で帙装の柱書きが書かれているわけです。

滝北 大阪天満宮の御文庫★っていうんですかね、あそこの箱書きにも先生の字が残っていますね。

明尾 ご興味の対象が幅広いですよ。先生は絵もお好きで、ちょうど北野恒富の展覧★の際に、滝北さんにも一緒に来ていただいて、北野恒富の「茶々殿」の前で撮影をしていただいた。

滝北 恒富はもっと大阪で知られなあか



北野恒富の筆塚と60周年記念式(2019年6月1日)

ん、っていうのは、先生はずっとおっしゃっていましたね。

橋爪 そうですね。高津宮の参道にある北野恒富の筆塚★の記念行事の際にも先生をお招きしましたが、快く来てくださった。

肥田先生ご自身の語りと原体験

滝北 肥田先生から、中之島図書館にお勤めになっていたときのお話を聞いた取材の録音ですけど、お聞きください。

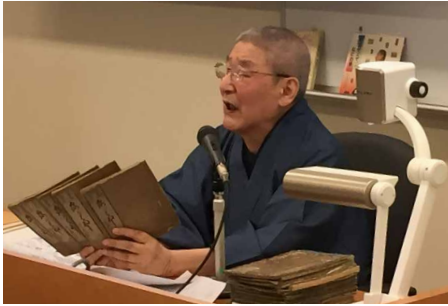
「昭和43(1968)年から私は、中之島図書館で古い書物の整理のお手伝いがかしてもらった。それは大阪郷土資料室の隣の部屋で、主任の多治比(郁夫)さん★と机並べて仕事させてもらてましてな。

大阪郷土資料室ということには、そりゃいろんな方がものをたずねにみえまんねん。もうそれは毎日毎日いろんな質問、いろんな問い合わせが毎日毎日。(中略) 隣の部屋で聞いててね、えらい出しゃばつたらいかんねんけども、やっぱりそんなときにね。それは「上方」の第何号に、それに関する記事が出てございますと。(中略) 時々のことちゃけど。そんなことがございました。

私その時に初めて思ったんです。私はほんまに役にたたん。病気で長いこと寝てて全然役にたたん。

★御文庫(おぶんこ)と呼ばれる土蔵が大阪天満宮にあり、江戸中期以来、大阪の出版元が奉納した和漢の書籍約10万冊が収められている。

★「北野恒富と中河内 知られざる大阪画壇の発信源」は、平成27(2015)年10月20日～11月28日、大阪商業大学商業史博物館で開催された。



所蔵資料を手に講演会の肥田先生

ここではねえ、まあなんとか役にたててもらえる。ここなんかで仕事させてほしいなあと切に思いましたわ。」

滝北 肥田先生は高津高校を中退して、そこから結核で10年ぐらいつとと寝てはって、仕事もなしで、その状態から中之島図書館に入って、そこで自分の生きがいというのを見つけられました。

私は先生から4年間お話を聞きしましたが、一番心に残ったのがこのお話で、こういうところに先生の原点があるのかなという気がします。

次は、大阪大空襲から70周年の時の「船場大阪を語る会」での講演からです。

「島之内の私たちの生活、江戸時代から続いていた我々の生活というのは、秩序、節度があったと。回想されるのは美しい町の姿、整然たる島之内の町並み。そこには豊かなゆったりとした暮らしがありました。

いかにも洗練された都会らしい日常。土地に染み込んだ文化の厚み。長い年月をかけて積み上げてきた生活の美がありました。これがやっぱり島之内という場所に、でもこれは島之内だけではなく、船場をはじめとして大阪の古い町はみんなこれですよ。

そう今日なんです。今日なんです。3月13日の深夜から翌日14日の早朝にかけて、アメリカ軍の空襲によってこれが全土、焦土と化した。一夜にして全部滅び去った。」

滝北 先生がおっしゃる本当に素晴らしい大阪っていうもの。先生はそこで実際に暮らしていっちゃって、それへの強い愛

★恒富の筆塚(恒富庵)は、昭和34(1959)年6月に北野恒富の13回忌に合わせて門人たちによって高津宮の参道に建設された。碑文は河東碧梧桐の筆による。

★多治比郁夫(たじひ いくお、1932～2015)、大阪府立中央図書館に長く勤務。郷土資料、古典籍の収集、保存及び研究に努めた。

着がおありだとわかります。

明尾 先生はもっさりしたことはお嫌いなんです。やっぱり都会人だと思うんです。

私なんか自分が今日も話してることを原稿に残すとか何話してんのかという感じになると思いますが、肥田先生のお話は多分そのまま文章になるんです。何ていうのか洗練された本当に都市型の人だと思うんです。

最近の人は、全部パソコンでやっているから、あとでも直せる。肥田先生の場合ほとんど漢字の間違いもないですよ。書く習慣もついている。

心斎橋そごうの古書の即売会などでも、先生は奥さんと一緒に来られて、パツと見たら鉛筆でそれを写しておられる。そうしたらそれが速い。間違いもないです。

若い頃からそうだったらしくて、調査で墓碑なんかを写したりする時に、先生は正確なうえに早いので、周りの人が驚いたそうです。時間との勝負や、とその集中力もすごかったそうですね。

橋爪 なんでも写メをとればいいというものではないと、学生にもよく言うわけですよ(笑)。確かに、自分も含めて、後からなんとかなるだろうと考えがち(笑)。

肥田先生の大阪・島之内言葉

滝北 やっぱり、肥田先生が話される言葉には、我々の大阪弁とは全然違うところがあります。島之内の言葉っていうのが、柔らかいし本当に優しいし、その言葉をしゃべる人って、もう今はほとんどいませんね。やっぱり肥田先生の人柄とかも、そのまま表しているように思いました。

新聞連載の文章もなかなか難しいのですが、できるだけ先生の言葉を生かそうと思うんですが、やっぱりそのままにできない言い方もありました。例えば、「だ



す」の省略形のような「だ」っていう言葉は、そのまま文章にするとやっぱり断定の「だ」に見えてしまう。先生が喋る「だ」っていう言い方はとっても柔らかくて優しい。そのニュアンスが出せたらいいなと思ながらも、やっぱり「です」っていうふうに書き換えたりするようなこともありました。

明尾 やっぱり「そうだ」の「だ」っていうところがね、ちょっと違う。

滝北 「そうです」の「す」がかすかに聞こえるか聞こえないような言い方。

明尾 実際、うちのじいさんが「そうだ」っていう時の「だ」は、先生の話し方とはあきらかに違います。うちのじいさんの場合は、河内弁と播州弁とが混ざっていて、職人の喋り方なんです。それに対して肥田先生の話し方は、島之内のモダンでソフトで、やはり都会的です。

うちのじいさんのはきついんですよ。たぶんその「だ」の後に「だんがな」というような「だ」ですね。「そうです」っていうのと、「そうだんがな」っていうのは、やっぱり違う。

滝北 島之内という中心地域の言葉っていうのは、河内なり泉州なりいろんなところからの流れがあって、それで少しずつ変質していって、今はもう原形をとどめてないっていう感じなんでしょうね。

明尾 菅橋彦さんは、司馬遼太郎さんの随筆★に登場されているのですが、その本の中で橋彦さんが「そうごわります」と言っているように書いているのだけれど、大阪の人が薩摩言葉みたいなこんな話し方してたんですかねって、肥田先生にお聞きしたことがあります。すると、先生は、それは言ってますわ、とお答えになった。実際は菅橋彦さんは鳥取出身の人ですよ。と問うと、五つで来てるから、もうこっちの人だ、と先生はおっしゃった。

橋爪 「ごわります」っていうのは、丁寧な表現で、「ございます」ということですね。

愛された高津の縁と同窓会

滝北 先ほども言いましたが、先生の高津愛はやっぱり結構強いものだと感じました。旧制の高津中学校に入って、新制高



高津高校100周年の会場にて

校に移ったのは昭和23年ですね。その時に先生は2、3年落第してたんで、結局9年1か月行って中退という形になるんですけども、肥田先生は一応卒業生名簿に載ってるんです。高校1期あるいは旧制中学の最終の期の同窓会があって、当時300人の名簿があったということです。

それで数年前に高津高校の100周年★があり、その時に旧制中学の同窓会から十人が来られたそうです。そんな話をお聞きした時に、昔の先生の写真をいろいろ見せていただいた。

まず、この写真です(次頁)。向かいには誰かはわからないですが、先生はネクタイをしてはるんです。なかなかめずらしい。多分昭和20年代だと思うんですけども。もともとは、幼い時から和服が多かったようです。次の写真は先生の可愛い姿。ものすごく面影ありますね。

それから、肥田先生はジャズがお好きで、お若いときに来日したデューク・エリントン★の楽屋に行つて、扇子をプレゼントした。そのときの写真があります。

明尾 ずっと以前の話ですが、肥田先生は「浪花のれん」という雑誌にジャズ評論家の肩書きで出てたんですね。それをコピーして、資料をお返しする時に持って行ったら、かなんなー、って(笑)。

滝北 先生は高津の他に学校はあんまり知らない。大学に行っていないし、やっぱり高津の知り合いや友達と年1回飲み会をするのが楽しかったというようなことをおっしゃっていました。

基盤目の迷宮、島之内が育てたもの

滝北 奥さんにお聞きした話ですが、肥田

★司馬遼太郎「余話として」は、昭和54(1979)年刊のエッセイ集。司馬遼太郎が菅橋彦から直接聞いた明治時代の話が度々引かれている。

「新葉審本撰」第5号の肥田先生の寄稿「心斎橋文人録」

★高津高校100周年。大阪府立高津高等学校は、大正7(1918)年に大阪府立第11中学校として創立され、昭和23(1948)年4月から大阪府立高津高等学校となり、平成30(2018)年に創立100周年を迎えた。

★デューク・エリントン(Duke Ellington, 1899～1974)は、アメリカのジャズの作曲家、ピアノ奏者でバンドリーダー。



珍しいネクタイ姿の肥田先生(左)



昔から着物姿が日常だった肥田先生(左)



来日したデューク・エリントンと肥田先生(右)

先生は、コロナ禍で1年間はご自宅にこもり切りだったそうです。ただ、ボーツとすることはまずなくて、なにかされている。納屋みたいなところが地下にあって、そこに資料が結構あったそうです。その中から奥さんが持って上がったものを整理して、たったたつたとノートに書き写していたそうです。

でもだんだんすることがなくなってきて、何を始めたかということ、雑誌の「上方」の写真とか挿絵について、これがどこから来たものかの整理に取りかかれたということでした。封筒にメモしたものをどんどん入れていったそうです。だから最後まで「上方」。すごいなあと思います。

弘本 先生の人生を方向づけてくれたのが雑誌「上方」。そして最後まで「上方」だったのですね。

滝北 先生は、やっぱり「上方」を血肉にしてこられた。奥さんに言わせると、先生は研究しているとか何かしてるっていう感じじゃないと。側から見ているとしんどそうにも見えるのだけれども、そう言う、いや楽しいねんから、少しもしんどない、みたいなことをおっしゃると。

本当にすごいなあと思うのと、お幸せだったのではという感じがするなあ、という気はします。

弘本 先生は空間の記憶もものすごく緻密ですよ。ご自分で地図を書いたりもよくされていた。

橋爪 きっと大阪人的リアリズムみたいなところがあって、鍛冶屋町45番地の碁盤目状の空間理解があるからでしょう。僕らも島之内で育ったから同様で、友達は

この辺りに来て迷うわけですね。どうみても碁盤目状の同じ景色ばかりやからねえ。もっと道が曲線的につづいていた方がわかりやすい。

明尾 先生が書かれたご自宅への地図があるのですが、それを見ても、いるものといらんものをちゃんと仕分けしています。

橋爪 その意味で、島之内は碁盤目状になった迷宮なわけですね。文化的濃度が濃くて著しく複雑。

弘本 見た目はどちらかと言うとシンプルですっきりしているふうに解釈してしまいますが、でも実は違う。

橋爪 それが今の地名では、島之内は狭くなってしまいました。肥田先生におうかがいしたら、みんな東心斎橋にしたいのかねえ、残しとけばねえ、という話になりそう(笑)。鍛冶屋町45番も堺筋にも近いしね。

滝北 堺筋というのは、かつての大阪のメインストリートですね。

橋爪 昔は堺筋に市電が通り、百貨店が並んでいた。御堂筋★ができて高島屋とかも現在の難波に移転した。

滝北 玉江橋★から四天王寺さんが南に見えるということは知られていますが、先生は奥さんに、玉江橋は太鼓橋で、それを北から上がっていくと、五重塔がどんどんせり上がってくる、だから、その驚きが七不思議みたいになっているんや、とおっしゃっていたそうです。これは、立体的な空間把握。

先生のおっしゃる戦前の島之内の姿とかは、私なんかぜんぜん知らないわけですから、今の大阪の人たちも、そんな豊かな世界

があったなんて思っていないでしょう。

とにかく高度経済成長時代に植え付けられた、大阪の人はがめついようなイメージを良しとしているうちに、これが固まってしまった。かつて肥田先生が生きてこられた、豊かな大阪の暮らし。それが戦争とともになくなってしまったといいますが、これは大阪にとって、とても大事な部分じゃないかと思うんです。

橋爪 肥田先生が育った鍛冶屋町の45番地は、宗右衛門町とか日本橋にも近いわけで、東に行くとか南区役所、道仁小学校があり、保健所があり、税務署があって、官庁街の趣もあった。反対に八幡筋を西へ行くと、これが骨董街であり古本街★であり、だるまや書店とか有名な柳屋、杉本梁江堂、荒木伊兵衛書店があった。1本北の周防町筋には尾上菟文堂があった。肥田先生はお若い頃、どこの本屋に行っていたのかなと思って、興味があります。

滝北 たぶん南の方に行っていたんです。波屋★さんとか。だいたいお父さんについて行ったら波屋について。北の方はあんまり行ってないようです。

橋爪 内容が子どもにはまだ難しいかもしれんね。さっきの話で言うと、八幡筋が骨董や古本屋街っていうのが、今ではまったく想像できないでしょう。

明尾 今ちょうど骨董屋のことを連載しているのですが、老舗の方にお話をうかがっていると、元々は八幡筋に店がありましたというところが多いんですよ。そこにある時から飲み屋さんが入ってきて、ちょっと具合が悪くなったということで移転したらしいです。

橋爪 今のイメージだけで、その時代を見るのはやはり間違っている。肥田少年を育てたのは、そうした地域の文化性でもあるのではないか。先生が高津の学校に行くのに通ったルートとかも想像すると、やはり興味深い。

滝北 学校に行くのには、なんか電車乗りたかったらいいですね。ほんと電車に乗っていかないでもいいのに乗って行ってたとおっしゃっていました。

橋爪 千日前とかからでしょうか。

滝北 そうですね。日本橋から小橋西之町まで乗っておられたそうです。

町人学者の系譜を受け継ぐ存在

滝北 とにかく肥田先生は、やっぱりもっと評価されるべき人やったと思います。大阪市では一度、文化表彰をされているんですが、それももう大学の先生をやってらっしゃった時代ですから、どう考えてもやっぱりちょっと冷たい評価だなと思わざるを得ないところがあります。

橋爪 僕は、肥田皓三という存在は、ひとりの研究者という言い方でも狭いと思っています。肥田皓三という生き方というかスタイルみたいなのがあるわけです。だから、僕らが無花果(一軸)会とかをやってるようなところにも、つながる部分があるのではないかと。

先生ご自身の身体の中に記録されているものの大きさもすごい。学術研究者であるのですが、もっと大きい枠で捉える必要があると思います。狭い枠だと、多分、肥田皓三とはいったい何をやった人かという話になってくる。単純に見ると、古い大阪に詳しい郷土史の狭い人というイメージで捉えられてしまう。国家がどうのという方じゃなくて、まちの細々したことに詳しい人みたいだとなる。でも実際はそうではない。

弘本 むしろものすごい気骨みたいなものを感じます。

明尾 やっぱりいろんな評価があって、近世史の偉い先生の中には、肥田先生には何かこれという一本の研究がないんじゃないかというようなことを言われる方がいる一方で、別の先生の中には、これが大阪なんだということを体現されている方だと、

★**木村兼葎堂**(きむら けんかどう、1736～1802)は、江戸時代中期の文人、文人画家、本草学者、蔵書家。大収集家として著名で「なにわの知の巨人」と称され、当時の多彩な文化人との交流でも知られる。

高い評価をされる人もいます。

例えば「なにわの知の巨人」と言われる、木村兼葎堂★という人がいます。この人も一筋縄ではいかないけれど、その業績は何か一本だけというわけじゃないですね。

ひょっとしたら肥田先生は近現代で兼葎堂の系譜を引いているお人ではないか。だから、国文の分野だけではわからないし、歴史学や芸能分野だけでもわからない。捉え切れない。

これだけ恩恵を受けている学者、研究者が数多いのに、あんまり冷たいんじゃないのかっていう思いは、私にもあります。

いずれ、それは先生に献呈する論文になるのか、どういう形になるのか、ちょっとまだわかりませんが、どこかが声をきちんとかけて、顕彰していくことがないといけない。肥田先生は、ひょっとしたら大阪で、もう唯一無二の人でしょう。



柳沢淇園展のポスター(大和文庫)と木村兼葎堂肖像(国立国会図書館デジタルコレクション)

大阪的な人っていうのは、一つの枠にとらわれない。様々な面を持っている。肥田先生は、兼葎堂からつながる人物で、橋爪さんもつながっている。そういう大阪の系譜っていうのは意外に大阪の中で評価されない。分かっている人は分かっているんですけど、もうそういう枠からきちんと捉え直していくのが、我々の今後の課題になってくんじゃないかなと思います。

橋爪 私が最初に読んだ先生の論文の柳里恭は、兼葎堂の先生で師匠。その系譜がありました。やはり肥田皓三というスタイルがあるんやと思うんです。兼葎堂には、やはりどっか似てるっていうか、そのDNA がどこかにある。

肥田先生がお持ちなのは、「記憶」という財産。そして経験。具体的なものにプラス

して記憶というものがあるから、多分ある時に意識が加速するんですね。具体的な資料などに記憶がば一つと絡まると、全体が加速するような感じがするわけです。

明尾 肥田先生は、時に、はっと声を上げはったり、うんうんそうやねとか、そうそうとか、とかいうものもある。ある時に、先生の中で記憶がつながってくるのでしょうか。

弘本 先ほどご紹介した、晶子と鉄幹の歌の話なども、ただ読んでただけだったから、そう簡単にはつながらないと思うんです。だけど先生にはいろんな経験とか記憶とか知識があって、それが瞬時につながっていくんでしょね。それによって常に心が活性化されているっていうか、お若いですよ、だから本当に声をあげたと、あの時も言われていました。

橋爪 僕らはもう還暦過ぎだから、いろんなものがつながりやすくなってるんだけど(笑)、同時に瞬間的に忘れてしまう(笑)。今までつながらなかったものがつ

ながるのは、そういうことかもしれません。**明尾** 私、先生の大学の講義で菅茶山の書状とか頼春水★の『在津紀事』など、いろいろな文献を読んでいたんですけど、先生はもう何年も読んでるはずですが、ある所に来ると、やはりなあ、この人はよろしいわ、とかって言われるんですよ。好きな人が出てくるとそう言われる。歴史研究的な部分で言うと、天皇とのつながりがあるとかないとか、思想史的にどうかというようなものの見方になって、肥田先生の人物伝みたいなところはちょっと外れてくる。ですけど、やっぱり私は人間があつてこそその歴史だから、先生のお話に共感するところが大きい。そのことは、いまだに覚えています。ほかの授業は覚えてないのですが(笑)。

「上方」を血肉とした大阪愛

滝北 先生は、小学校5年か6年の作文で、将来何になるんやとって、郷土史家って書いて、おじいちゃんに怒られたそうです(笑)。それは趣味でやるもんやと。

やっぱり子どもの時に見た「上方」が影響しているんですよ。初めは読めなくても、表紙の絵に惹かれてというようなことのようにです。

橋爪 肥田先生が、どこまで「上方」の資料を読み込んであったのかも興味深いですね。

★**御堂筋**は、大大阪の主要道路として計画され、大正15(1926)年に拡幅・建設工事を開始。昭和5(1930)年には地下鉄(梅田-心斎橋間)工事も始まり、着工から11年後の昭和12(1937)年5月、梅田から難波を結ぶ御堂筋は完成した。

★**玉江橋**(たまえばし)は、現在の大阪市・堂島川に架かる、なにわ筋の橋。かつては下を船が通るために太鼓橋であり、大阪の七不思議の一つとして「玉江橋の南に天王寺さんの五重塔が見える」などと言われた。

★**八幡筋**には、荒木伊兵衛書店が御堂筋の東に入ったところにあり、柳屋は豊屋町の角で、杉本梁江堂は2本東の玉屋町。木村旦水のだるまや書店も一時は柳屋の数軒東にあった。1本北の尾上菟文堂には俳人の山口誓子通っていた。

★**波屋書房**は、難波にある大正8(1919)年創業の書店。作家の織田作之助が少年時代から立ち寄っていた店としても知られる。現在は料理書の専門書店。

★**頼春水**(らい しゅんすい、1746～1816)は、江戸時代中期・後期の儒学者、詩人。頼山陽の父。交友録的な回想記『在津紀事』と『師友志』は、当時の大坂で活躍した文人たちの人間関係を伝える貴重な資料。

滝北 闘病中の10年間、細かい部分を読み込まれて、それぞれの文章の関連付けをしながら、ご自分で索引をつくっていったそうです。だから、なにか言葉を聞いたら、一瞬でそれはここにこう書いてある、これだと思って出せるわけです。「上方」というのがやっぱり先生の血肉になっている。

橋爪 「上方」の表紙絵の話では、「難波三大橋」があつてね。石和板の錦絵「浪華百景」★の中之島にかかる三大橋は難波橋、天神橋、天満橋が描かれ、難波橋を幕府軍が渡っていて、大砲を引っ張っている。最近の研究では、この幕府軍は長州征伐に出る姿をイメージしたものようです。一方で「上方」の表紙にも、この石和板「浪華百景」の三大橋をもとにしたものがある。だからパッと見ると「浪華百景」の三大橋を「上方」がそのまま表紙にしていると勘違いしますが、よく見ると「上方」の表紙は、画面の下が道頓堀に変えられている。これって、いちびっているでしょう。

弘本 「上方」の表紙の版画はどれもかなりいちびっていますね。ある種ジャーナリストチックな一面もあり、最新の出来事・災害とかも扱っている。

橋爪 本歌取りはやるんですが、三大橋のようにパロディ的なんですよ。肥田先生が、それをどう思っただったかも聞いてみたかった。

滝北 南木芳太郎さんも、知る人ぞ知る有名人だけでも、業績ほどに評価が高くないと思いますよね。そういう人に対する、深い親愛の情というのが先生にはありましたね。

橋爪 肥田先生のエピソードで思い出したのですが、大阪市史編纂室で「大阪の歴史」の道頓堀特集の座談会みたいなものがありました。私も出席しましたが、話の中でなんとはなしに大阪市歌★というキーワードが出た時に、先生はいきなり大阪市歌を歌い出した。それにつられて他の出席

者の道頓堀の老舗の人たちも一緒に歌い出して、合唱し出したんで

す。ある年齢から上の方はみな歌えますからね。大阪市歌は、幸田露伴とか森鷗外が審査して、大正時代に中之島に市役所が移転した時につくったもの。小学校でも朝礼とかで歌わされたから、私も歌える。

道頓堀は高津の参道みたいなもんやないですかって話から、瞬間に火が点いて、肥田先生がいきなり歌い始めた。われらの諸先輩方はすごいなと思いました。

先生の業績にどう応えていくか

滝北 私は、やっぱり肥田皓三賞みたいなものが必要だと思います。とにかく大阪府や大阪市なりが肥田先生の功績に何とかちょっとでも応えようと思ったら、賞をつくるべきでしょう。



肥田
皓三
肥田先生の青インクの手紙より
食満南北著『大阪藝談』刊行記念展会場にて(平成28・2016年)

橋爪 先生は、それはよろしおますけど、私の名前を付けてもらわんでもよろしい、とかってきつと言いはるのとちがいますか(笑)。

明尾 もしも肥田皓三賞っていうのができたら、分野としたら、芸能が入るでしょうし国文が入って、歴史学や美術関係その他いろんなものが入ってくる。ジャズもそう。

滝北 ダンスや落語まで入る。

橋爪 研究だけでなく、収集、趣味、そういったものも含めていろんなことをやってらっしゃる。

滝北 対象は、いわゆる大学者じゃなくて、それこそ在野の人でも良い。例えば、年に一回紀要を出して、シンポジウムをして、それで年度表彰とかを各分野でする。

明尾 そしたら、例えば分野ごとに基金を募って、全体である程度の額が集まったら賞の制定と本の出版をするというのが面白いのでは。

滝北 少なくともシンポジウムのものが、年に1回できれば良いと思いますね。

橋爪 肥田皓三記念シンポジウムを年に1回開く。

明尾 肥田先生の記憶ってというか、その断片がね、私も含めていろんなところに受け継がれている。だから、それをもう一遍お返しをしてですね、次の世代に伝えていくということが必要でしょうね。

滝北 先生は本当に何の欲もない人ですよ。それに、ものすごく人に親切です。

弘本 今日お話を伺っていて、中之島図書館で人を助ける仕事をされたってところにつながってくるんじゃないかと感じています。それによってご自分も助けられたわけですよね。その経験が大きいのかなと思いました。

橋爪 肥田先生みたいな方は、なかなかおられないからね。人それぞれ肥田先生から受けた影響というのはみんな違うと思います。私なんかそのスタイルみたいなものの影響が一番強かったと思う。先生の業績には、無論、学術研究がありますが、こういうスケール感、天下国家を論じるんじゃない、人間的な大阪らしいスケール感がある方だった。だからこそ、この先我々がどう受け継いでいくかが、大きな課題として残るんじゃないでしょうか。

滝北 やっぱり昔のことしゃべってる時は、先生もうれしそうでしたね。

橋爪 無花果(一軸)会を含めて年に2回ぐらいしか、最後はお会いせんような感じでしたが、確かにそうでした。

明尾 ああいう会をさせていただいて先生をお迎えして、みんなでお話させていただくような機会、あれは幸せでしたね。やっぱりいろいろお話もお聞きでき、先生も喜んでくださいました。

橋爪 先生は存在感があるから。すごい存在でした、改めてそう思います。

弘本 ゲストの皆様、本当に先生への敬愛に満ちたお話をありがとうございました。

名残りはつきませんけれども、これにてメモリアルトークを終わらせていただきます。

改めて肥田先生に心からの感謝の念をささげたいと思います。ありがとうございました。

※このドキュメントは配信時のトークのニュアンスを大切に、テキスト化に際して多少の編集を加えています。



★「浪花百景」(なにわひゃっけい)は、浪花の名所風景を100枚の錦絵に描いた浮世絵木版の組み物。3人の絵師、國貞・芳瀧・芳雪による合作で、幕末に大坂の版元「石和」より刊行。図は「三大橋」(大阪市立図書館デジタルアーカイブ)

★大阪市歌は、「高津の宮の昔より…」で始まる。大正10(1921)年の中之島の市庁舎建設を機に歌詞が公募され、森鷗外、幸田露伴らが審査にあたり、堀沢周安氏が入選した。作曲は中田章(薫)氏。